

水俣巡礼団、熊本入り

募金渡し、患者を激励

水俣病を市民に訴える「東京—水俣巡礼団」の一行十人は、九日午後三時三十一分熊本駅前の急行「えびの三号」で熊本入りした。

ホームには水俣病訴訟派代表の渡辺栄蔵さんや水俣病市民会副会長の日吉フミ子さん、それに石牟礼道子さんから水俣病を告発する会の会費約百人が出迎えた。

一行はさる三日、白装束の巡礼姿で東京を出発、途中、大阪、北九州などで水俣病の悲惨さを訴え、カンパや署名運動をしてきたもので、いずれも東京の告発する会の会費たち。

巡礼団がホームに降り立つと、渡辺さんらがかけ寄り、一人々々に握手、「いっぺんさん」「ありがたうございます」と、長旅をねぎらった。

一行の代表格砂田昭さん（劇団俳優）は「各地で多くの人々と水俣病について話をかわしてきたが、われわれの気持ちにストリートに通じたようだった。浄財も千圓以上に集まった。とにかく旅

に出てよかった」と語り、水俣病患者が待つ駅前広場に向かった。

広場には訴訟派の患者家族約三十人が出迎えていたが、巡礼団は患者たちに向かって「ただいま着きました」と深々と一礼。団員の紹介があり、砂田さんが自作の詩を朗読。患者の中には涙を流しながら詩に聞き入るものもいた。

日吉さんは、この詩を引用して

「食けたらあかん。勝ち抜くのや。きつと勝つ」と激励、こんごの健闘を誓い合った。

このあと一行は、駅前一帯で署名とカンパを募り、花畑公園まで歩いた。そして午後六時から交通センターホテルで開かれた歓迎会にのぞみ、各地で集まった募金約六十二万円を患者に渡した。

また水俣病を告発する会の本田

啓吉会長は「訴訟派の人たちに絶対めじめな思いをさせたくない。

皆さんの生活を守るために、現地水俣に基金制度を設け、一千万円を集めたい。患者の家庭が必要なのは、あるとき払いの催促なしで貸して上げるようにしたい」と激励した。一行は十日水俣市に向かう。